書　評

尾島　俊雄著

読売新聞社発行

未来住宅—新しい都市生活（アーバンライフ）はどうなるか—

評者　飯　島　孝　志*
Takashi Iijima

情報化，国際化など産業構造の転換が急速に進展する中で，首都圏はもとより日本大都市の居住環境は良好とはとても言い難い．地価高騰や人口動態などの諸課題を考えると，未来の都市生活に対しても明るい展望が浮かばないのが現状である．

本書は，未来の第4次産業（第1次，2次，3次産業間の情報流を管理する産業社会）の波を想定しながら，我々を取り巻くマクロコスモス（文明や技術など外側の世界）とミクロコスモス（文化や精神など人間の内側の世界）の2つの観点から，エネルギー問題を含めて将来あるべき都市と住宅の構図をかなり大胆に予言したものである．

第1章では，都市の文明開化について述べ，第2次工業社会から情報，サービスを柱とする第3次産業社会へと発展しつつあるなかで，都市や住宅においても，現在こそが，精神的な欲求を満足させるような文化の仕掛をうまく作り上げるべき時期であり，またそのゆとりもできつつあるのではないかとしている．第2章では，産業構造の変遷による都市の潮流として，マルチハビテーションや職住一体型の新しい生活様式が生まれるとし，第3章では，情報流をベースワークとする第4次産業社会においては，生産活動の拠点は各自の家庭に分散され，かつネットワーク化されるとし，このための，「都市型住宅・産業コンプレックス」を想定している．第4章では，ホームオートメーションとマルチハビテーションを核に多様化するこれからの住宅産業は，基幹産業として多くの脚光を浴びるものと位置づけている．第5章では，先端住宅の環境基盤として，現在の居住空間を再生することを模索し，二重地表面による地上空間の活用を中心に，地下空間，海上，海中などの利用を検討している．生活様式の多様化にともなうエネルギー消費量の増大に対しては，未来はむしろ「もったいない」から脱するとし，それを意識革命に求めるのでなく，自然エネルギーや都市廃熱を利用して実質的に無駄を省いたインフラストラクチャーすなわちオートノマス（自律型）機能を有する都市設計が必要であるとしている。第6章では，家を支える文明の先端機器として，HAとホームバス，ロボット，物流系パイプラインなどのマクロ的な要素技術とその利用技術について言及している．第7章では，未来住宅に新しく生まれるミクロ的な空間を考え，各家庭に大黒柱的存在として外的環境及び内部の情報を制御する「コックピット」の必要性を提唱し，同時に，自然と人間，人間と人間の接点の場としてのアトリウム，コモンスペース，未来型隠居空間も盛り込むべきであるとしている．

最後に第8章では，首都圏の都心および郊外に開発すべき先端住宅を4つ提案している．すなわち，都心のビル屋上に設ける「ペントハウス」，ウォーターフロントの住工一体型の超高層集合住宅「インダストリアルハウス」，郊外においては現存のアパート群を3～4世代同居の恒久的な邸宅群へと転換を図る「レジデンシャルハウス」，山間近くには自然と共存し自給自足できるリサイクル型の「エコロジカルハウス」である．

本書の記述は教科書風ではなく，都市工学の第一人者である著者の頭脳の中を随筆風に描写したようで，十分理解できない面もあったが，都市，住宅というものを人類の文化，文明の基盤とし，その現在から未来への潮流を見極めながらなされた新しいアーバンライフと住居の提示は，専門外の者にとって鮮烈であった．また，全ての技術開発の目的は人類を豊かにすることと頭ではわかっていても，本書の，あくまで住まい手側の生活自体に密着し，人間の豊かさの根源までさかのぼっての考察は，他分野の技術者にとっても，熟慮，議論するべき課題を多く提供していると思われる．

* 松下電器産業㈱中央研究所エネルギーグループマネージャー（主幹研究員）
〒570　守口市八雲中町3丁目15